

職員のキャリアパス

所属	氏名 役職	専門
地質・地盤研究グループ 土質・振動チーム	佐々木 上席研究員	河川・道路
水工研究グループ 水理チーム	猪股 主任研究員	河川

職員のキャリアパス（佐々木上席研究員の場合）



振動チーム主任研究員～様々な地震被害への対応

基準類の改定や、災害時の支援等にも携わりました。十勝沖地震、新潟県中越地震では下水道施設の液状化被害が多発し、現場の復旧支援に参画しました。これまで研究してきた液状化対策が復旧時に採用され、指針類にも反映されました。また、新潟県中越地震や能登半島地震では道路盛土の被害が多発し、これを踏まえて被災要因や対策工法の調査研究に携わりました。研究成果はその後、全国の道路盛土の耐震点検、耐震補強事業に活用されました。



液状化による下水道被害の調査



道路盛土の地震被害の調査

土質・振動チーム主任研究員

組織改編によりチームが合併。これまで主に耐震を専門としていましたが、これらに加えて道路土工構造物や河川堤防の洪水や豪雨への対応等、より幅広い分野の課題に対応するようになりました。

土質・振動チーム上席研究員～頻発する豪雨災害への対応

近年頻発している豪雨災害の際には専門家として現地に派遣され、復旧工法等の助言を行っています。東日本台風の際には、国交省からの要請により現地に派遣され、また、復旧工法等の検討のための地方整備局の委員会に専門家として参画しています。また、東日本台風の堤防被害を踏まえ、国交省本省、地方整備局、国総研等と連携して、粘り強い堤防の実現に向けて検討等にも取り組んでいます。



千曲川の堤防決壊



堤防決壊に対する技術支援

採用

10年目

20年目

現在

動土質研究室研究員～大型実験施設を活用した実験

阪神大震災の翌年に土構造物の耐震に関する研究室に採用になりました。阪神大震災に対応した技術基準類の改定の資料作成や、地下構造物の液状化対策、盛土の耐震、基礎の耐震、落石対策等様々な構造物について大型実験施設等を活用した実験や調査に携わりました。

土質・振動チーム上席研究員～東日本大震災への対応

チームリーダーとなり様々な課題の解決に向け、スタッフと一緒に研究を進め、技術基準類の改定等の研究成果の実務への反映にも取り組んできました。東日本大震災では、各種構造物に液状化による被害が多発しました。被災原因の調査や復旧工法について検討するとともに、道路盛土や河川堤防の現行設計法の検証や耐震性照査、対策手法を検討し、マニュアル等にとりまとめたり指針類の改訂に反映しました。



河川堤防の液状化被害の調査

本人コメント

土木研究所では充実した施設や現場データ等を活用した研究、現場へのニーズに対応した研究から先を見据えた研究まで、幅広い課題にチャレンジすることができます。また、災害時を含めた現場への技術支援や技術基準類の改定への参画等を通じた、研究成果の普及、実務への反映も重要なミッションとなっており、やりがいを感じています。



佐々木上席研究員

1996年採用
地質・地盤研究グループ
土質・振動チーム

職員のキャリアパス（猪股主任研究員の場合）



土木研究所 水災害研究グループ (ICHARM) (1～7年目)

採用後ICHARMに配属となり、主に海外を対象とした研究に従事しました。思い出深い研究は、一番最初に携わった「カンボジア王国・トンレサップ湖の水収支に関する研究」です。トンレサップ湖の動態に驚いたり、現地に何度も赴いてカンボジアの人達と雨量計などの観測機器を設置したり、学生時代にはできなかった様々な経験を積むことができました。



現地の人達と雨量計を設置
(一番右が私)

国土技術政策総合研究所 水循環研究室 (8～13年目)

国総研に異動し、国内の河川行政に係る技術研究に携わりました(主にダム運用と洪水予測)。ダム運用については、近年頻繁に耳にするようになった事前放流操作をはじめとした運用操作の高度化・導入、洪水予測については、流域の上流から下流まで連続的に洪水の危険度が分かる「水害リスクライン」の初期の開発に従事しました。国土交通本省、地方整備局の方々、大学の先生方との意見交換を通じ、土研、国総研の役割や責任の重さについて考えさせられる日々でした。



研究の役に立つかなと思い、気象予報士の資格を取得

採用

8年目

15年目

現在



猪股主任研究員

2004年採用 (入所17年目)
水工研究グループ水理チーム

私が思う土研の特徴

土研のミッションとは、シンプルに言って「国土交通行政等を技術的研究により支援することで、国民の皆様により良い生活に貢献すること」だと思います。「研究所」ではあるけれど、研究を行って成果を論文にすることは最終目的ではなく、「研究成果及び日頃の研究活動により蓄積した知見を、技術基準や現場への技術指導等を通じて使ってもらうことを目的とする」。これが土研の最大の特徴だと思っています。時に大きな責任も伴いますが、同時に大きなやりがいも感じることができる研究所だと思います。

土木研究所 研究企画課 (15～16年目)

研究から一度離れ、所の運営に携わる研究企画課に異動しました。ここでは、外部が土研をどう見ているかについて考えさせられる機会が多く、単に論文発表するだけでなく「分かりやすい形」で研究成果を対外的にアピールすることが所の運営上とても重要であることに気づかされました。その他にも研究チーム在籍時には知らなかった気づきが多く、今後の自身の研究活動に役立たいと考えています。



事務局を務めたシンポジウムのパネルディスカッションで発言している様子